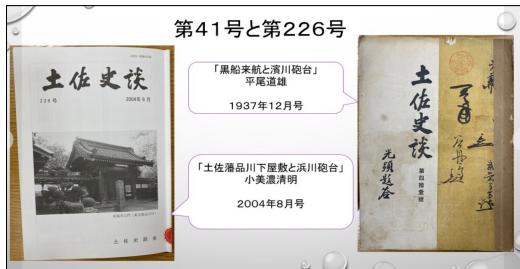


# 幕末土佐藩の海防政策

## 樋口真吉顕彰会・会報誌

### 土佐藩はペリー来航以前から何故海防に熱心であったのか？

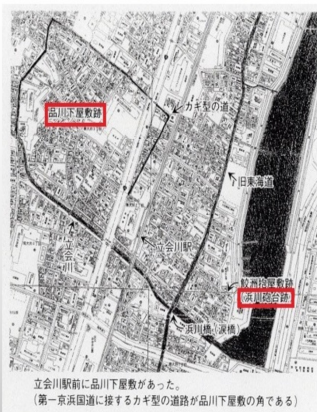
江戸にも砲台を造っていた土佐藩



●先頃会員の岡村大さんから東京の品川区に土佐藩が構築した濱川砲台の痕跡が今も残っており、その砲台構築に樋口真吉が関与した可能性を示唆して頂いた。濱川砲台については初耳であったので頂いた情報を調べてみると土佐史談の会報誌に詳細が掲載されていた。ペリー来航の嘉永六年に幕府は江戸湾岸沿い

発行人  
会長 土森正一  
文責 寺尾敏夫

### 土佐藩の屋敷が江戸に七カ所もあった！



二 品川下屋敷と鮫洲抱屋敷  
幕末期、土佐藩の江戸表における屋敷は七つある。  
上屋敷 鍛冶橋御門内  
中屋敷 日比谷御門内  
下屋敷 菜地 三田（安政三年、薩摩藩へ譲渡）  
深川砂村  
品川（大井村）  
鮫洲（浜川町）  
抱屋敷

に藩邸を持つ藩は砲台を構築すべしと命じた。土佐藩はこれに反対が出来なかつた。品川下屋敷を持つ土佐藩はやむを得ず砲筒砲弾などを土佐から運び準備に入つた。翌年ペリーが一月十五日に再度江戸

余力はないものの幕府には抵抗できず、八門の大砲を備えた濱川砲台を構築した。その時幕府が造つたのが今も残るお台場である。当時幕府は和戦両様に準備をしていたのだが、幸い日米和親条約が締

湾に現れて、土佐藩は慌てて江戸在住の砲術家の藩士、徳弘孝蔵に命じて一月二十一日から三日間で台場を造成した。九十九里の長い海岸を持つ土佐藩は、海防力を江戸湾に割く

結できたので濱川砲台等は撤去したという。●この濱川砲台の構築に樋口真吉が関与したかもという視点で検討したが、嘉永七年のこの年に土佐藩は真吉に命じて幡多沿岸十七カ所の砲台構築にかかつていて江戸の砲台構築には手が回らなかつたと考えた方が自然ではないだろうか。ただ濱川砲台の出来栄が他藩の砲台に比して評価が高かつたと記録にあり、大砲の製造に可能性も

あるかもしれない。ただこの大筒等は前年におり、それらの製造時期は定かではない。当時土佐藩には反射炉が無く大筒を製造したとするなら青銅製のはずである。偶然右の写真が、青銅製のホイッスル砲だと記されている。樋口真吉が自ら描いた幡多砲台図編にモルチール砲を描いているので、恐らく幡多沿岸の砲台にはモルチール砲であつたと断言して良い。

### ホイッスル砲の復元

2017-07-15 21:41:21 | 歴史・文化財



先日、偶然見た東海道品川宿の海岸寄りの小さな公園にあった「浜川砲台」。ペリーの再来航に備えて土佐藩が独自に8門を配置した、そのうち一番大きい「30ポンド6貫目ホイッスル砲」だった。2015年11月に「品川砲馬会」をはじめ地元が資金を集めて復元が実現した。

### 中村市史に見る土佐藩の海防策

●中村市史には詳しく幡多沿岸の海防策について記述されていた。土佐藩の海防の基本的な考えは、「江戸幕府伝統の鎖国政策を守るために、日本領土に接岸する外国船舶は拒絶するか撃退するか、いずれにしても海岸防衛は等閑視することは出来ない」ということに尽きるようである。撃退するか、外国船を接岸させない程度の備えをすることを目的としていたのなら、発砲する能力が求められているばかりか、撃退するだけの備えが必要になる。江戸時代後期になると何度か異国船の漂着もあり、十九世紀になつて異国船の漂着が多くなつてきた。土佐藩は弘化五年（1828）三月に次頁で紹介する幡多沿岸4地区（上川口、下田、清水、三崎）に配置する要員を決めている。これが「海防令書」である。

# 海防令書

▼守備範囲  
 上川口・鈴ヶ田ノ浦  
 下田・下田窪津  
 清水・  
 三崎・養老古満目  
 とあり、それぞれ守備  
 範囲がかなり広い。  
 ▼足軽・各二十名  
 ▼筒役(砲手)上川口  
 が一名以外は各二名  
 ▼郷士と地毛浪人各二  
 十名〜七十六名  
 とある。この数字には  
 随分と矛盾がある。筒  
 役の人数が少なすぎる。  
 足軽や郷士、地毛浪人  
 の数も果たしてこれだ

け確保できたのか疑問  
 である。恐らくは地図  
 を描いて作った机上の  
 計画ではないか。何故  
 なら六年後に樋口真吉  
 が幡多沿岸十七箇所に  
 台場を造った時の台場  
 と大砲の数とこの人数  
 が全く合っていない。  
 上川口台場は二方所で  
 あり、筒手が一名で良  
 いはずはないのだから  
 この時期には具体的な  
 台場のイメージが出来  
 ていなかったことが判  
 る。下田の体制よりも  
 上川口の人数が異常に  
 多いのは何故なのか？  
 実はこの時期幡多奉行  
 所では兵員が足りない

ので民兵を募集してい  
 るのである。この動き  
 と並行して幡多奉行所  
 は樋口真吉により藩校  
 建設の建白書を弘化元  
 年(1844)に藩庁に  
 提出し、藩校建設の準  
 備に入っていた。海防  
 令書のでた翌年にも真  
 吉は二回目の藩校建設  
 の建白を提出していた。  
 海防の懸案である兵員  
 の養成を急務と感じた  
 からである。明治維新  
 になった時点で幡多奉  
 行所の書類一式は一部  
 宿毛に移されたとの伝

# 文武館は海防兵員養成が目的

承があるものの実際に  
 は全部破棄されており、  
 幡多奉行所の事績を解  
 明することが出来ない  
 のが実情である。わず  
 かに樋口真吉の書き残  
 した記録がその部分を  
 補ってくれているが、  
 彼の書き残した記録を  
 単なる私的な日記だと  
 捉えているので文武館  
 が実は海防のための兵  
 員の教育機関であった  
 との視点が軽視されて  
 いる。しかし「四万十  
 市史」には貴重な史実  
 が書き残されていた。  
 それは郷士や地毛浪人  
 と有力商家の海防に対  
 する意識の高さが他に  
 例を見ない民度の高さ  
 を示す二つの事例とし  
 て記録していた。これ  
 らを勘案すると間違い  
 なく文武館は海防兵員  
 養成が目的で建設され  
 たと断言していい。

# 銃砲操練の実施

●幡多奉行所は大筒の  
 実射訓練を行うことを  
 奨励していた。そのた  
 め奉行所で銃砲を貸与

この上川口は「御分一役所備備」のものである。  
 文政十三寅七月申村於渡川相國稽古仕度段奉願、御開届被二仰付候。御自分より先達而被願出度相國火槍古  
 打ノ義御目附中江御達ノ七、願ノ通御開届被二仰付候。其心得可レ有候。以上。  
 寅七月廿五日  
 入野御大庄屋  
 猪石順次郎殿  
 交通不便の当時、入野から中村へまで行つての大筒稽古の熱意に注目すべきである。  
 なおこの邊川での大筒稽古は木戸明等も行つてゐる。木戸庄之助(安政二年生)からの開書によれば、  
 「大神宮の所で大砲を鑄た。大砲三十八門、モチール砲が八門か十門で、自費負担と聞。不破の矢野川秀造や上  
 岡弥右衛門が職人として働いた。  
 不破の河原へ大砲をすえつけ、香山寺に大きなむしろをたらし目標としてこれをついに玉(弾丸)がシュル  
 く」と音をたてて、しかも玉のぶきが見えた。大砲は色々あるが長さ約三尺、口径約八寸、モチール砲は長さ約  
 二尺、口径約二寸である。」  
 なお製砲についての中心人物には山崎慎六郎がある。彼の砲術研究は相当深いものがあり予も多し。

していた。その一例が  
 右の資料である。これ  
 によるとまだ比較的平  
 穏な文政十三年(1830  
 )に入野浜や上川口、  
 中村で大筒の稽古打ち  
 が行われていたことが  
 確認できる。記事によ  
 りれば真吉が関与した幡  
 多沿岸十七カ所の台場  
 の出来る以前の話であ  
 る。海防令書の出た年  
 の二十年も前から大筒  
 の実射訓練が行われた  
 とは驚きである。その  
 訓練場所が入野浜、渡  
 川(八幡宮前)入田、  
 具同の名前が出てくる。  
 こんな記述もある。  
 「なお渡川での大筒稽  
 古打ちは木戸明等も行つ  
 ている。木戸庄之助か  
 らの開書によれば、

【大神宮の所で大砲を  
 鑄た。大砲三十八門、  
 モチール砲が八門か  
 十二門で、自費負担と  
 聞。不破の矢野川秀  
 造や上岡弥右衛門が職  
 人として働いた。不破  
 の河原に大砲を据え付  
 け、香山寺に大きなむ  
 しろを垂らして目標と  
 してこれを打つに玉  
 (砲弾)がシュルシュ  
 ルと音をたてて、  
 しかも玉の飛び様が見  
 えた。大砲はいろいろ  
 あるが長さ約三尺、口  
 径約八寸、モチール砲  
 は約二尺、口径約二寸  
 である。】「なお製砲  
 については中心人物に  
 は山崎慎六郎がいる。  
 (右資料)また右記の  
 記事に続いて宮崎文書  
 の紹介として「安政元  
 年(1854)七月二日  
 の記に「幡多郡入田村  
 芝原にて銃砲操練始  
 る」とあって、具同だ  
 けでなく入田も(銃砲  
 操練に)利用されてい  
 たことが判る」とある。  
 幡多奉行とが銃砲と弾  
 丸の貸与ばかりでなく  
 砲術指導者を優遇し、  
 操練の奨励を行つてい  
 たというが、これらの  
 銃砲操練の参加者は郷  
 士であり、地毛浪人た  
 ちであったろう。しか  
 し之ばかりではない。  
 中村には大砲、銅製品  
 大砲等の献納  
 と献金の一大運動が起  
 きていたという。

右同断之節、開付次第鉄砲並有合之玉葉相携、直隸右場所へ欠付、不船船と見請候はば御役人は勿論浦々御分一  
 役任三差図一成たけ可二打扱一事。  
 (註、以下郡外の郷士関係のものとなつてゐる。)  
 以上

文化七年五月  
 江戸幕府伝統の鎮国政策をまもるために、日本領土で接岸する外国船舶は拒絶するか撃滅するか、いずれにしても  
 海岸防禦は等閑視することはできなかった。弘化五年(一八四八、嘉永と改元)三月には左表に示す海岸守備地区  
 守備要員が定められた。

陣地	守備地区	司令	足軽	筒役	郷士	地下浪人
上川口	鈴ヶ田ノ浦	同(外輪物頭)	二〇	一	六四	七六
下田	下田窪津	幡多郡奉行	二〇	二	二〇	二五
清水		外輪物頭	二〇	二	二三	二五
三輪	養老古満目	同	二〇	二	二〇	二七

(備考)合計郷士七四二、地下浪人五三三、足軽六〇〇、筒役一七二となつてゐる。筒役とは大砲兵、その他表外には別記す  
 る。  
 文久三年(一八六三)度の記録では郷士は地下浪人、民兵、家老付与方、騎馬と混成して東西要地に配備されてい  
 るが、(佐々木高行日記)これら郷士は慶應二年(一八六〇)九月になって郡別に各郡奉行の所管に移された。(中  
 略)また各郡局において所要の軍旗も制定された。(海南政典)



存寄書一例

切な想いが書かれてい
る一例をご紹介します。
●桑原猪三郎は金三両
と銅三貫五百を献金し
て左記の一文を提出し
ている。概略を記すと
「私の先祖は三万石中
村藩に奉公していたが
廃絶のため浪人になり
ました。幸い旧家の支
配を任される仕事に就
けたが元の俸禄とは比
較にならない状態で代々
貧窮してきました。し
かるに国家のためなら
身を挺する覚悟は出来
ています。現に今のご
時世は実に二千五百年
来の一大事に付き、父
子共々覚悟の上武士の
一分のため命を投げ出
す覚悟が出来ています。」
と武士道そのものの想
いを述べていますね。
何ともけげなげな覚悟で

幡多沿岸十七カ所の台場

す。果たして現代の我々
日本人にこの覚悟があ
るだろうか？もう既に
日本に武士はいないか
もしれませんね。
●ペリーが二度目に来
航した嘉永七年（安政
元年）、土佐藩は樋口
真吉に命じて幡多沿岸
十七カ所に台場を造つ
た。各台場に大砲も複
数台設置したはずだか
らよくもまあそんなに
大量の大砲を準備でき
たものだと半ば疑念を
感じていた。中には見
せかけの台場もあった
のでは・・・と。しかし
四万十市史の解説を調
査すると中村の地元商
人のみならず郷士、浪
人たちから大砲五門が
献納され、木戸明が三
十八門の大砲を自費で
铸造したとの記述を見

ると、それら全てが幡
多沿岸の台場に活用さ
れたと見て良い。銃砲
操練に従事してきた史
実を吟味すると異国船
来訪への恐怖というか
海防への意識の高さが
数台の大砲を献納し大
砲の製造のために資金
と銅製品の供出に協力
したばかりか、存寄書
を書いて海防への意見
を具申したというから
幡多郡奉行の政治もお
見事だというしかない。
民間から寄進された大
砲で試し打ちを行う訓
練が少なくも二十年以
上に渡って行われてい
た記録も記載されてい
た。それらの総まとめ
が樋口真吉による幡多
沿岸十七カ所の砲台構
築であったと見られる。
●上川口砲台の調査を

桑原猪三郎

存寄覚

私儀三万石御代奉公仕候以後浪人相成候。其後旧家の訳を以御直支配ニ被仰付候。然二元禄旧禄ニ相離候。二
而、代々貧窮ノ者御座候共、為國家、身命ヲ投可レ申覚悟仕候。然二当御時勢之儀は実に二千五百年之大事之
事と奉レ存候得共、父子共覚悟極不及ながら武士之二分相立御報恩可レ仕心得ニ御座候。已上。

亥八月八日

した時、安光哲也氏の
報告書によれば二カ所
の砲台のうち一つは
「青銅製の大砲は大正
時代まで蝮川河口の川
底に放置されていた。
子供たちが見ていた。
後に廃品回収に出され
たか行方不明」、もう
一つは「蝮川河口辺り
に埋もれていたが見つ
かり生徒たちが大勢で
掘り出して県道際まで
引き上げて放置。太平
洋戦争中古金として売
却した。」と書かれて
いた。残っておれば貴
重な歴史遺産であつた

「砲台図編、樋口武子文選、土佐幡多郡海岸砲床胸壁、安政元年（1854年）奉命築之」

Table with 2 columns: Location (e.g., 宿毛鑑洲, 橋浦中崎胸壁) and Description (e.g., 長三拾六間、幅拾間(図解なし))

樋口真吉による砲台設計図面



編集後記

●十月の龍馬ワールド
の準備で当顕彰会とし
て協力をする中で、大
会が終わった最終日に
幾つかの観光コースを
準備しているのですが、
その一つに「樋口真吉
コース」を創って案内
をすることになってい
ます。その予行演習を
二度ほど行って説明の
内容等について目下吟
味している最中です。
●果たして参加者が何名
集まってくれるのか不
明な中で、少なくとも有
料で参加してもらおう
上それに見合う内容な
のか？、果たして説明
がご理解いただけるの
か？頭の痛い所です。
日ごろボランティアで
気楽にやっている事と
は違う緊張感があつて、
悩むことしきりの昨今
です。ご期待ください。

ろうが仕方が無いのか
もしれませんね、